

文化

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

(18)

石原 昌家

系数アプチラガマ内調査 学生と実施し、2000年は、1975年(5月)6の4回目だけ、日比野勝廣(元)・90年(島袋淑子元)・92年(沖繩出身の元)日本兵の真喜志康一氏と新垣尚子(元)の3回は

をとつていった。特筆すべきは84年10月78年に次ぎ2回目のリニユールオープンをした県平和記念資料館で、75年に作成したアプチラガマ内見取り図が拡大して展示されたことである。展示業者が「専門家作成の見取り図かと思つた」と語っていたのは、当時の学生たちに聞かせたい褒め言葉だと思つた。さらに、2000年4月に移築した沖繩県平和記念資料館にも、00年までの追加調査をふまえた見取り図が展示採用されている。これも学生たちの活動が評価されたものと受け止めている。

手探り

見取り図の出版物での公表は「虐殺の島」(1978年、晩聲社)に続いて、2000年6月発行の『沖繩の旅』アプチラガマと轟の壕(集英社新書)に掲載した。99年7月に民家裏の出入り口を掘り出したという沖繩出身元兵士の新たな証言を得て、集大成することになった。

アプチラガマの調査 ②

そしてこの系数アプチラガマは、45年2月から4月30日まで日本軍の洞窟陣地壕、5月1日から6月2日まで南風原陸軍病院系数分室、6月3日から8月22日まで「軍民一体化」した壕として使用されていたことをほぼ正確に把握できたので、見取り図も3種類作成するに至つた。

75年作成の見取り図は、三つの時期をひとつにまとめたものだったが、それを時期ごとにまとめたとき、25年も経過していた。アプチラガマ内の状況については、南風原陸軍病院から傷病兵として移送された日比野勝廣さんの手記「沖繩の鍾乳洞で一晩」とともに半『従軍回顧録』(岐阜県従軍回顧録編集委員会編、70年11月20日発行)と、防衛隊員として南風原陸軍病院から重傷患者を搬送した池宮城秀意さん(琉球新報社社長)が体験を記録した「戦場に生きた人々たち」(沖繩戦の記録)「サイマル出版会、68年10月20日発行)によってある程度把握はしているつもりであった。とはいえ、75年の最初の壕内調査は手探り状態だった。作成した見取り図を基にして未知のガマ内調査のあらましを説明していき

1プがC地区出入り口(本)から滑り落ちるようになり、左手は米軍が壕に籠城している人たちが生き埋めにしようとした痕跡が残っている土の上の方に、アフリカマイマイの大量の殻が流れ込むように積まなかつた。怖さ知らずの男子学生たちは、身体が入るところはすべて潜つて、どのような遺物・遺品があるかを確認していった。思いがけない場所からニユールと、男子学生がはい出てきたとき、系数住民の誰も入らなかつた。頭蓋骨もそろつた遺骨は全部取寄せられていることを確認できた。

時期ごとくに役割変化

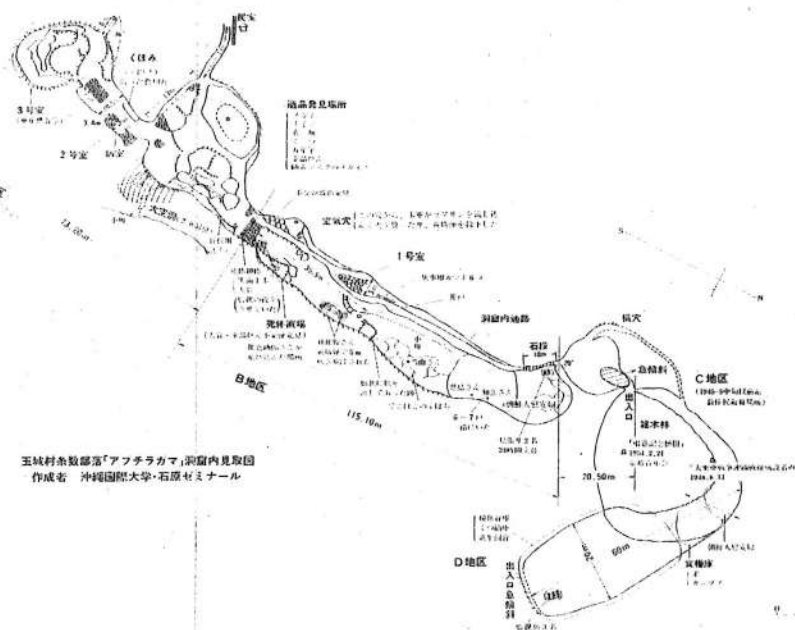
「軍民一体化」の経緯確認

たい。

迷路のような壕

第1グループ(国吉真剛君、新垣京子さん、新垣直子さん、州鎌武夫君、私)と第2グループ(安里武君、金城千恵子さん、譜久嶺聡君、長嶺文雄君、比嘉賢盛君)の二手に分かれ、10人ずつ入壕することにした。洞窟内の距離測定については専門的知識をもつ考古学ゼミの比嘉君が助っ人として加わってくれたが、主体は社会学石原ゼミ生の2年次から4年次の混合グループだった。

午前10時30分に第1グループで迷路のような形状を



玉城村系数部「アプチラガマ」洞窟内見取り図
作成者 沖縄国際大学・石原ゼミナール

学生たちの調査を基に制作したアプチラガマの見取り図



アプチラガマを調査する学生たち=1975年5月25日

確認できた。その左手のくぼ地には、前日までの豪雨のせい、激しい音を立てて勢いよく水が川となつて、氾濫することなく流れていた。その一角に日本軍が掘った立派な井戸があった。その先の流れは地下に潜つていった。

右手には堅牢な石垣が積み上げられ、人手が相当加わつた痕跡が見つかった。その左手に2階建ての兵舎が建てられていたとおぼしき大空洞を確認するや、バリケードと見まがう石積みが大天井まで届いてアツと驚いた。そこを越えるとA地区で迷路のような形状を

1号室には数個の不発弾、2号室には、メガネ、ナイフ、くつ、万年筆、薬品ビン類、防毒マスクのメガネらしきものや腐った板切れなどが残つていた。(次回は6月19日掲載)